

大学のオートノミー－阿部元総長が語る東北大学－

曾根原 理

はしがき

東北大学の歴代総長に対する聞き取りは決して多くない。史料館では以前、ご本人の了解を得て第18代の阿部博之総長（在任：1996年11月～2002年11月）に、在任期間の事業を中心とする話を伺う機会があった。阿部先生は東北大学退職後、政府委員などを勤め、大学の内部はもちろん、外からの視点も加えて論じられた。阿部先生の略歴は、次のとおりである。

昭和34年（1959）3月 東北大学工学部卒業
同 年 4月 日本電気株式会社入社（～昭和37年2月）
昭和42年（1967）3月 東北大学大学院工学研究科機械工学専攻博士課程修了（工学博士）
同 年 4月 東北大学工学部講師
昭和43年（1968）10月 東北大学工学部助教授
昭和50年（1975）8月 ノースウエスタン大学客員研究員（～昭和51年7月）
昭和52年（1977）10月 東北大学工学部教授
平成5年（1993）4月 東北大学工学部長・工学研究科長
平成8年（1996）11月 東北大学総長
平成14年（2002）11月 東北大学名誉教授
平成15年（2003）1月 総合科学技術会議議員（常勤、～19年1月）
平成19年（2007）2月 科学技術振興機構顧問（非常勤）
平成28年（2016）1月 同 特別顧問（非常勤）

その他、紫綬褒章（平成12年）、瑞宝大綬章（同24年）、学会賞多数、全米工学アカデミー外国人会員など

多彩な経歴をもとに語られた内容は、貴重な歴史的証言としての意義を持つと考えられることから、今回その記録を活字化し紹介する。なお、本記録の作成にあたっては、曾根原が音声を活字化し、適宜再構成などを施した上で、阿部先生本人および同席した阿見孝雄（東北大学萩友会広報委員会委員）・永田英明（東北大学史料館准教授）両氏の点検をうけ、添削を施した。

日時：2013年12月2日（月）14時～17時

場所：東北大学本部棟2F 応接室

聞き手：阿見孝雄（A）・永田英明（N）・曾根原理（S）

話題：

1. 共通のテーマについて
2. 江沢民主席の東北大学訪問
3. 未来科学技術共同研究センター（NICHe）の開設
4. 留学生センターの開設

5. 東北大学の倫理綱領
6. 大学院重点化と東北大学歯学部
7. 工学研究科の技術社会システム専攻の設置
8. 生命科学研究科の立ち上げ
9. 青葉山の土地問題
10. 言語文化部の廃止
11. 入試改革
12. 総長特別補佐と副総長
13. 大学教育開放センター
14. 病院の併合
15. 環境科学研究科など
16. 医学部関係
17. 多元研と WPI
18. 大学の世界ランキングなど
19. 改革のために

1. 共通のテーマについて —大学のオートノミー(autonomy 自治)—

阿部：今の国立大学が非常に大変だと思うのは、国からの運営費交付金が減らされ…人件費も減らされているんですよ。

S：ええ、もちろんです。

阿部：遠山（敦子）文部科学大臣の時に、「国立大学法人法」が国会を通ったのですが、その際に衆参両院の附帯決議があって、運営費交付金は国が用意するというのを、きちんと決議しているのですよ。それが、舌の根も乾かないうちに削り始めた。たまたま、私があるとき遠山元大臣に会う機会があって、東京でね。その時に高等教育局長を呼び付けて、大臣がものすごく怒ったのです。そのくらい、政府っていうのは、当てにならないところがある。衆参両院が附帯決議して、それでその結果なんです。

今回お話しする共通のテーマは、大学のオートノミー(autonomy 自治)ということです。今、大学の自治とかオートノミーの議論はどのくらいあるのですか。全く私には聞こえてこない。

N：そうですね、聞こえてこなくなりました。具体的な行動としては、出てこないと思いますね。

S：無くなっていく方の話は聞きますが…危機感はあるのだと思いますけれども。

阿部：大学のオートノミーっていうときに、現在の時点で考えると、3つぐらいに分かれるかと思います。1つは、大学の役割と政治との乖離。遠山元大臣が怒ったように、政治はつれないところがあって、信頼できないところがあるのと、それから非常に短期的ですから。代議士は、次の選挙までに票に反映するようなことには熱心ですけどね。そういう、大学の役割と政治との乖離。

それからもう1つは、風潮との乖離。ポピュリズムとの乖離でもいいんですが、そういう問題が一つある。これをどうするかっていうことですよね。ポピュリズムも非常に熱しやすく冷めやすいところがあるから、大学のように長期的な、教育っていうのは特に長期ですから、その大学の役割と政治ないし風潮との乖離をどうしていくかという問題。

次は大学のオートノミーの問題。大学といっても、個々の大学が、やっぱり特色を持たなければいけない。国全体から見たら、ダイバーシティ (diversity 多様性) っていうことになるわけですが、これが日本は非常に弱いんですね。アメリカの大学なんかは、州立大学でも、大学の自主性やオートノミーを持っているんですけども、日本はそういう意識が政府にも少なく、小さい。以前私が驚いたのは、ある中規模国立大学の例。その大学の学長は、大学の改革っていうのは国がするもので、自分たちがするものでないと言っていた。東北大学の中に、そういう認識っていうのは有りますか？私は聞いたことなかったのだけれど。

N：え？(絶句)

阿部：どう？びっくりしますよね。ただし複数の人に聞いたわけじゃないですけど。私はやはり、国立大学の問題っていうのは非常に大きいと思う。例えば里見(進)現総長に、「プレッシャーを掛けますね」と言われたことがあるのは、「東大の総長は普通の人でもなれる、東北大の総長は普通じゃ勤まらない」と話をしたことがあるんだよね。

A：それは鋭いご指摘ですね。

阿部：国は結局、東大を第一に考えますから、不利にならないようにする。けれど、それ以外の大学は、駄目になったらその大学が悪いということで、政府は逃げられる。それで、前述のような有力な中規模(旧帝大から見て)大学は、積極的に改革をするというよりは、改革は政府がする、それを一生懸命学内でフォローしていけばいいという考え方が、もし全国の大学に画一的にあるとすれば、私は、たぶん全体主義的なことになっちゃうんじゃないかという気がします。そこで、個別大学の特色とか個性が問題です。例えば東北大学が早々と、研究第一主義というのを創立の当初から言い出したのは、国立大学としての東北大学の主張ですよ。大学のオートノミーの2番目は、その国立大学の問題です。

3番目は、オートノミーを実現するときに、何がハードルになるか、どこが壁になるかという問題。今までお話ししてきたことから大いに想像できるように、国がなかなか、東北大学のオートノミーの実現を理解してくれるように見えないとか、あるいは反対のことを国会が決めるとか、そういう対国の問題と、それから対自治体の問題と、対社会の問題と。で、今(というか私が総長をしている頃から)政府がどのように考えているかという、改革の実現ができないのは教授会が抵抗するため、というのが政府の一般的な理解で、政治家もそうだし、それから経団連みたいなのところも、そう思ってる。しかし、これは非常におかしい。私の現役のときも、ある有力な大学は教授会が反対するために学長がやろうと思ってることができないと、文部省にお願いして制度的に助けてもらった例がある。

N：そうでしたね。

阿部：それから国大協(国立大学協会)で、色々な学長の主張を聞いていると、改革ができないのは、やっぱり教授会や学内が非常に抵抗勢力になってできない、学長にもっと権限を与える、と言っているのを聞くわけですよ。私が思うに、学長の方が情けない、自分の能力がないということとイコールなのに。ところが、教授会批判の見方が強いのですよ。ある旧帝大の総長はまさにそれで、政治家や文科大臣にそのような提言をしている。これからの日本の高等教育、あるいは大学研究にとって、オートノミーっていうのをどうしていくかというのは大問題だと私は思います。

たまたま先週ヨーロッパ(ベルギーとイギリス)から帰ってきたのですが、やっぱりああい

う古い国は、大学のオートノミーっていうのは、社会も大切にする雰囲気が残っています。日本はどうもそこが怪しくなっていて、これからどうなるのかと気がかりです。

私が総長の時代やその前後に、大学の改革を色々していた頃、当時の国立大学は、あらゆることを政府の概算要求に乗せてもらわないと改革ができなかった。おかげさまで色々の改革をした際に、政府にどうやって理解を求めるか……喧嘩するというのではなく理解を求め、賛成してもらおうかというのが非常に大切で、これは恐らく今でもそうでしょう。法人化した後でも「政治主導」というのは、大学を手取り足取りしたがる向きがありますから。

2. 江沢民主席の東北大学訪問

中国の江沢民主席が1998年に来学された前後に、「魯迅の階段教室」（魯迅がそこで勉強したという、座席が階段状になっている古い教室）に中国人がたくさん来て、感動して、黒板に何か書いて、事務官がその写真を撮っては消し撮っては消して、メモを保存していましたが、今はどうですか。

N：最近の日中関係が厳しいので、来場者は減っていると思います。それでも、多いことは多いと思いますけれど。

阿部：そうですね。留学生の役割は、非常に大切です。例えば今、アメリカに中国から、留学生たくさん行っているでしょ。習近平さんのお嬢さん（習明沢）も、ハーバード大学に留学したそうですね。優れた中国人がたくさん米国に行って、一部は中国に帰ってきたりしています。そうすると、政府同士は仲が悪くなっても、中国人と米国人が徹底的に対立するというのは、なりにくいですよ。そういう留学生の役割っていうのは、非常に大きい。

N：そう思います。

阿部：よく知られている話ですが、英国とフランスは、第二次世界大戦の後も人的交流の政策を取っている。日本は非常にそこがまだまだで、中曽根首相の時代に留学生10万人計画というのがあり、今30万人計画がありますが、とてもその程度では不十分だし、お金も掛けてないからね。

A：そうですね。

阿部：私は最近聞いてびっくりしたんですが、ドイツとフランスは第一次世界大戦、第二次世界大戦、その前のビスマルク時代の普仏戦争とか、しょっちゅう戦争ばかりして、憎しみが増すに決まってるでしょ、自分の近親者が死んだりするのだから。それで戦後、800万人累計で交流したのですよ。アデナウアーとドゴールが相談したのだそうです。両国は中国や日本よりも人口が少ないのにね。やはりそのくらいの規模が必要だということを、彼らは真剣に考えたのですよ。その点日本はちっとも考えていないのでは。それだけに、魯迅と藤野先生の交流は、非常に意義が大きいのですね。

日本は、戦争中までは結構中国から、あるいは台湾や韓国からも留学生が来ましたが、大東亜共栄圏の名残だということで戦後やめたのかどうか知りませんが、戦後は非常に消極的になってしまった。戦前は魯迅に限らず、他の大学でも結構留学生が来ていた……日本側から行っているのが少ないのは、ちょっと問題なんですけど。

以前話したこともあります。実際は、江沢民さんは来ない予定になっていたのですよ。聞いたことがあります？

N：いや、初耳です。

阿部：そうですか。来ないことになっていまして。来られたのは？

N：11月の末だったと思います（11月29日）。

阿部：9月ごろに最初の話があった時に、宮城県、仙台市にはお出でになるけれども、東北大学にお出でにならないことになっていたんですよ。それで、私は非常におかしいと言って、変更してもらった。私は非常に心配した。というのは、もし江沢民さんが仙台にお見えになって、それで魯迅の関係の碑をご覧になって、でも東北大学に来られないでそのままお帰りになったら、必ず側近の誰かが「魯迅の階段教室」をご覧になりましたかって聞くに決まっていますよ。あれだけ有名なので。そしたら、ご覧になってないということになったら、処罰の対象になりますよ。私が処罰されるわけじゃないですよ。中国の担当者。

A：中国の担当者が、ですね。

阿部：それで、これは良くないということで、9月から11月の末の間に予定を変えてもらったのですよ。かなりしんどかったですけどね。それで、お出でになることになったのです。

A：どこがしんどかったのですか？どこの部署が？

阿部：いやいや、日本政府の方針に逆らうわけですから、私たち。

A：わが日本政府自体が問題だったんですか。

阿部：政府が、東北大学に寄らない方針を決めた。中国側が独自に、東北大学に寄らないなんて決めることは無いと思うのですよ。それで色々調べてみました。私に対する公式の説明では、「公式」っていうのは、文章はないのだけでも、東北大学に何故寄らない、そんなことではおかしいということと言ったら、これは外務省なのか警察庁なのか、どこだか出所は分かりませんが、東北大学には過激派がいて、それで不測の事態が起きるかもしれないという。それで私は、そんな可能性は全くないと言った。それは確かに、過激派はいる。私は寮問題とかで、総長室を占拠された最後の総長ですから知っています。しかし彼らは、学生でない職業的過激派も寮に巣食っていましたから、危険なことは危険ですけども、彼らは江沢民さんを不利にするようなことはやらないですよ。

A：そうですね。

阿部：これは思想的なこともあるかもしれませんが、本当に強い人に向かっていくっていうのはないのですよ。大学はいわば、ある種国家権力の先端にいて、逆らえばそれだけ（彼らにとっての）効果がある。大学は、柔軟性とともな弱さを持っていますからね。しかし、国家権力の強いところに真正面から立ちただかっていくというのは、戦術的にしませんし、そんなことをする可能性はない。

それからもう一つは、万が一、江沢民さんが不快な思いをするような事態になったら、彼の周囲には私服の警護担当者が、結構たくさんいるんですよ。何かあればすぐに動いて、本人には害が及ぶことは、仮に万が一ですよ、私は万が一にも起きないと思います。それから、もし過激派学生がいて、もし失礼なことが起きたら、私が辞職すればいいんですよ。私が辞職するのは、これは天下に、私を有名にするために、中国にとっても日本にとっても、東北大学も知名度が上がって、マイナスのことは何もないでしょ。だから私が辞めればいい。もう世界中に広まりますからね、江沢民さんが東北大学に来られたこと自体が。実際当時は、パリの大学にいた日本の大学の先生が、私がテレビに出たのを見たと言うぐらい、世界中に報道されました。

史料館にたまたま展示されていた蘇歩青（1902-2003）の書。私の感覚ですが、江沢民さんはとてもびっくりして、何であそこに蘇歩青さんの書があるんだということを私に聞きました。私はすぐ、東北大学の卒業生だからと言って、いろいろ説明しました。実は蘇歩青さんは、江沢民さんが最も尊敬してる上海時代の大先輩だった。こうした理解も、もし東北大学にお出でにならなかったら、なかったことです。

もちろん政治家ですから、東京で反日的な色々な歴史認識をお示しになって、仙台で親日的な歴史認識をお示しになったのは、政治的なことは割り引かなきゃいけないですけども、やっぱり留学生に関する史実は重いですね。藤野先生が、こうやって留学生（魯迅）を世話した歴史も知ってもらえる。

以上は、政府に理解していただいた一例です。今後、国が本当はもっとお金を掛けて、良い留学生が来るように増やさなければいけない。特に韓国と中国は、日本と負の歴史的経緯がある国ですから、ドイツとフランスほどでないにしても、あるいは考えようによっては、それ以上の事でもあるんです。これからどうして友好を図っていくかというのは、非常に大きい課題だと思います。



漢詩を掲げる江沢民主席、その左が阿部総長（いずれも当時） 1998年11月29日

3. 未来科学技術共同研究センター(NICHe) の開設

阿部：私の6年間ってというのは、非常に幸いなことに、いろんな改革が出来たのです。なぜ出来たかということは、後から振り返ってみると、私が総長に就任した直後ぐらいから、国立大学法人化の議論がホットになり始めたことが背景にある。国立大学を独立行政法人にする、独立行政法人なんか大学に合わないに決まっているんです（法人格は持っていた方がいいとは思いましたけれども）。当時国立大学というのは頑迷固陋で、何ら改革ができないというのが一つの批判の材料であったと思うんですよ。実は、国が非常に固かったかっていうこともありますけれども。こういう批判が出てくると、教授会自治の負の面とか、国も色々と大学をがんじがらめにして来たことに対する反省が、少し出てくるんですよ。たまたまその時、（前任の）西澤潤一総長から私にバトンタッチされて、引き続き大きい改革を矢継ぎ早に企画したのを、ほとんど国が認めてくれたんですね。たぶん私が、10年か20年前に総長になってたら、そんなにうまくいかなかったんだと思うんですよ。

それから東北大学の中にも危機感が結構ありました。もちろん守旧派も、どこでもいるんですが。それで、私が総長になった時、最初にやった仕事が未来科学技術共同研究センター(NICHe)の創設なんです。何故NICHeを作ったかという、当時各大学に、地域共同研究センターというのがあったが、東北大学には無かったのです。国が、助教授のポストが1くらいの新設で中規模の大学に作ったのですね、昭和62年頃。東北大学はなぜ必要ないかという、地域共同研究センターを、助教授ポスト1つくらいを作ったら、ボトルネック（その小さな部分が要因となり、他所をいくら向上させても状況改善が認められない構造）になる。東北大学の場合は、各部局とか研究所がそれぞれ産学連携を独自にやっていたので、ここを通さないと話が進まないようにしたら、ボトルネックになるだけで、そんなもの要らないと。西澤先生もそう思っていたらしいし、私もそう思っていたんですが、そうしたら東京大学と東京工業大学に大規模な産学のセンターを作ることになったんですよ。私が学部長の頃です。非常に驚いたのは、東大のセンターが、予算化される直前に、全国に何十とある地域共同研究センターの元締めをするという話が聞こえてきました。聞いたことがあります？

N：いや、全然。初めてですけど。

阿部：もしそうであるとすれば、全体主義的なものを作るのは大学には合わない。東京工大の方は中止になって、東大が全国の元締めになる。それで私は、こんなことを国がやったら、日本はおかしくなる、東北大学は東大以上か東大並みのものを作るべきだという議論を、学部長のときにしていました。それで総長に当選して、すぐこの仕事を始めて、結果として東大よりも大きいのを作りました。私は直接文部省に行っていませんが、文部省から、東北大学は西澤先生の時代から、地域共同研究センターは要らない、要らないって言っていて、何で今ごろ作るのか、と。それで、小さいのでもいいかっていうことを言われて、私は、ちっちゃいのなんて要らない、東北大学みたいにたくさん部局があって、みんな産学連携、それぞれ特色を持って、色々な対応の仕方している、と。それで最後は、東大より大きいのを作ってくれたのですよ。

今の私の感覚としては、NICHeは大変大きい役割を果たしてくれました。ただし、当時の役割と今の役割と違うんじゃないか。東北大学にまだプラスになってるうちは、つぶさない方がいいと思いますけどね。どうですか、プラスになってますか。

N：どうでしょうね。

阿部：私は、ちゃんと説明すればいいと思った。東北大学の産学連携の各部局の努力っていうのはすごく大きいので、これだけ大きいのが必要なんですと、本旨を十分理解してもらうと良い結果が得られる、その一例です。既に皆さんがよくご存知の2代目総長の北條時敬先生が、女性を入学させるときに、政府からイエスと言ってもらわないのにやった。あのころの総長は偉かったのかもしれませんが。北條総長は様々な改革をして、東北大学の学風の礎を作られた方ですけれども、結局は彼のおやりになったことは、歴史的に見れば、非常に評価されてるわけです。政府の短期的な政策に機械的に従うのは、私は東北大学らしくないと思うんですよね。

4. 留学生センターの開設

阿部：留学生センターって、今ありますか。

N：留学生センター、はい。

阿部：あれはどうですか、問題は抱えていますか。

N：どうでしょう。

阿部：私が総長になる前の話です。国際交流専門委員会で、評議員経験者の充職か何かで、私がトップダウン的に委員長に指名されたのです。改革がだんだん熱を帯びてきた頃に、他の大学と違って留学生センターを、さっぱり東北大学は作らないのです。私はそのころに、何で作らないのか質問したら、理由は分からないと。本当のことは分かんないですが、他の大学の後塵を拝していたんです。そこに教養部改革が動き出して、教養部に何人か関係する教員がいたんですね。留学生センターに移るのは嫌だって言うんですよ。それで理由を色々聞いてみたら、その留学生センターの目的が、教育施設で研究が無い、それでは駄目だと言うんですよ。それで、私が文部省へ行って説得してくると。東北大学が教養部廃止したときの基本線は、二種類の教官を作らないということでした。学部と研究科の方は研究第一主義で、教養部はそうでないような差を過去に作ってしまった、実質的にね。そのこともあって、西澤総長時代に教養部解体の議論をやっているときだったから、なおさら皆さん神経質になっていたのね。文部省の留学生センターの関係書類、たしかに教育施設で、「研究」はどこにも書いてないんですよ。私が文部省へ行って、文部省を説得する、それで説得してオーケーになったら留学生センターへ移ってくれるかって言ったら、イエスで。それで文部省と交渉したら、すぐイエスですよ。それで留学生センターができた。だから、東北大学の留学生センターは、少なくとも研究を目的にしているんです。

(補足：東北大学留学生センターは2005年に国際交流センターに改組され、その後2014年の高度教養教育・学生支援機構の設置にともない統合された)

5. 東北大学の倫理綱領

阿部：当時、東北大学の倫理綱領っていうのを作ったの、知らないかな皆さん。国家公務員の倫理規程というのがあるんですよ。それを制定する前に各大学に、その準備段階として、倫理綱領を作れと。そうしたら、他の大学全部が、文部省が作ったモデルがあって、それに従っている。私は、こんなもんおかしいと思った。本省の公務員というのは、予算を握って、物を発注したりとか、会計事務と密接に関係するが、大学の教員とは違うんですよ。それなのに大学の倫理綱領を、事務を優先的に書くのはおかしい、教員の倫理綱領っていうのが当然あるべき

だと。そこで東北大学だけ、大学らしいものを作ろうと言って、作ったのです。残念ながらこれは、国家公務員の倫理規程が出来たために、全部没になったのですが、1年か2年か3年か、東北大学だけ、その違う倫理綱領を持っていた時期がある。これを本省へ行って説明して、東北大学の倫理綱領を通すという話になったわけです。それで、倫理綱領を作った委員長（学部長）に、事務任せにしないで本省へ行って説明してきてくれ、それでも駄目だったら私が行く。大学教員と本省の公務員と、同じ倫理規程っていうのはおかしい。大学の先生っていうのは、研究教育に関しては厳しくなければいけないけれど、会計なんて触ったこともないんで、教員に握らすのはおかしいと言ったら、その頃に伊藤博之という事務局長がいたんですよ。

A：はい。存じております。

阿部：伊藤博之事務局長が、それは私に任してくれって言うんですよ。どういうことなのかなと思ったら、当時の庶務部長か、あるいは関係の課長を私のいる前で呼んで、これ本省へ持って行って置いてこいと。で、質問されても何も答えるな、東北大学はこうしましたから置いてこいて言った。彼は東北大学の法学部の卒業生だよ。

S：そうですか。

阿部：侍だった。それで東北大学だけ、私から見るとまともな、私が作ったんじゃないですよ、その先生方に作ってもらったのがあって、それで、1年か2年か、東北大学だけが大学らしい倫理綱領を持った。しかしその後、国家公務員の倫理規程が法律化された。どうしてああいうことを国がやるのかね。大学の事務官は仕方ないですよ。事務官は、本省の事務と似たようなことやっているから。大学教員の倫理は大幅に異なります。北條総長の時だったと思いますが、東北大学では、物を買うときに教員が発注してはいかんということを決めたのを知っていますか。

A：いや、それは知りませんでした。

阿部：北條総長のとき、色々な大学で色々な不祥事が起きた。今でも起きる。例えば比較的新しい、10年ぐらい前に、早稲田大学の教授が、研究費を自分の判断で貯金したり流用したりして、問題になった例があるんですよ。それは早稲田大学の仕組みが良くない。東北大学では、例えば私が教授時代に東北大学で初めて、科研費の特別推進研究が採択され、3億3千万円という当時日本で一番大きい金額が認められました。その時の会計を、私は1回もしたことない。大学の事務がする。最初にその仕組みを始めたのが北條先生なんです。当時は東北大学でも教授が色々な物品を発注していたし、ごく最近まで他の大学でも、そういう例は珍しくなかった。だけど北條総長は、それは駄目だって言うんです。これからは全部事務がやるので、教授が勝手に発注をしないようにと。そしたら、教授はみんな反発した。日下部四郎太っていう論客の先生がいた。北條総長は日下部先生でも、商人にはだまされるからダメだと。

A：あ、その話は聞きました。日下部四郎太先生が、自分は大丈夫だと言ったが。

阿部：北條先生は、すぐだまされるって。ただし八木秀次先生だけ、あれは例外だ、あいつは商人がだまされる。

A：とても印象に残ったエピソードでした。

阿部：八木先生みたいなのは滅多にいないんだ、と。だから、教授たちは納得したんですよ。たぶんそれ以後ずっと、教員が金に触るといことはいいですね。それにしても、東大の医学部なんか、厚生科研費なんかで、15年ぐらい前まで自分で会計処理をやってましたからね。早稲田だけが悪いのではないんだよ。これも一種の、大学のオートノミーなんですね。

6. 大学院重点化と東北大学歯学部

阿部：大学院重点化っていうのをやったでしょ。

N：はい。

阿部：オフレコになっているのかもしれませんが、実は東京大学と京都大学は、政府が全学部で重点化することに決めたんです。ところが東北大学は、歯学部だけが重点化の対象に入っていなかった。

S：シ学部って、歯の方ですね。

阿部：さらに北大とか九大なんかは、幾つかの学部が重点化の対象外だったんです。私は、大学院重点化自体は、あんまり賛成じゃない、バスに乗り遅れると損するからやらざるを得ないだけの話で、その趣旨は賛成しませんけれども。東北大学の場合、歯学部だけもし重点化されなかったら継子扱いになりますね。

A：まったくその通りです。

阿部：北大とか九大は、幾つかの学部が重点化されませんので、その意味ではマシです。どうして歯学部かというと、東大、京大に歯学部が無いのですよ。

A：ああ、そういうことですか。

阿部：そういうことではないかという気がする。それで、歯学部を含めて大学院重点化してもらったんです。どういうふうにしてやったかっていうのは、これもオフレコですが、私が頼んだのではありませんが、当時の衆議院議長が、東北大学の歯学部を重点化しろということを行ったらしい。私は彼に頼んでいませんけれども、歯学部だけを重点化の外に置くのはまずいということについて、歯学部の先生よりも私の方が危機感を持っていた。

A：本当ですよ。

阿部：そんなやり方では駄目だと。それでそれが、どういうルートか知らないけども衆議院議長の耳に届き、彼の発言で変えた。結果は、旧帝大は全部重点化することになった。他の旧帝大は、東北大学のおかげで全体として重点化できた…？

A：ほー、そうだったんですか。素晴らしいことですね。

阿部：そんなことは全然、他の人には分からない。誰も知らないわけですから。これはどこかに書いていただくのが適当かどうか、分かりませんが、もし私が、自分だけいい子になっていれば、歯学部だけが継子扱いになったでしょう。

A：そうなりますね。

阿部：いや、だから最後は、文科省もなるほど思ってくれたのでしょうか。何となく東京、京都で全学部になって、そこで歯学部の重点化なんて誰も考える人いないんですよ、政府には。ただ、成り行きでそうになっていただけだと思うんだよね。別に政府がもともと、歯学部を差別しようと思ってたわけじゃないと思うんですけどね。ただ、こういうのは、本省の課長クラスぐらいでは対処できないんですよ。もっと上にならないとね。

7. 工学研究科の技術社会システム専攻の設置

阿部：工学研究科に、社会技術専攻っていうのは知ってます？

A：社会技術専攻？

阿部：名前少し違う？研究とか入ってました？

N：名前が少し違ってるのかもしれませんが。すみません、正確には分かりません。（注：正確には「技術社会システム専攻」か）

阿部：これは全く新しい専攻で、何をやるかという、例えば科学技術をいかに社会に還元するかとか、特許戦略であるとか、産学連携のあり方とかいろんなこと。これを私が総長の時、案が出てきました。他の幾つかの大学も作ったのですが、他の大学ではマスター（博士課程前期）で終わりだったんですよ。別に不思議じゃなくて、アメリカなんかでも、この社会技術的な専攻は、だいたいマスター止まりが多いんですね。ドクター（博士課程後期）が無いわけではない。私は、作る以上はドクターを作らなければ駄目だと言い出して、無理をして本省に認めてもらったんです。それでドクター作ったのと同時に、この専攻の中に、科学技術政策っていうのが確か入っているのですよ（注：正確には「政策系」か）。

A：そうですね。

阿部：効果として非常に面白いのは、今の経済産業省、昔の通産省とか文部科学省の役人で社会人入学をして、科学政策でドクター取った人が結構たくさんいるんです。他の大学が立ち上げる前に作ったからね。これ、一つのフロック（まぐれ当たり）でね。

A：東北大学らしい取り組みですね。

阿部：私はそういう効果が出ることを意識したのではなくて、東北大学に置く以上は、皆博士コースを作らなければダメだと、そういう単純なことで。だけど結局は、文科省がイエスと言ってくれなければ作れませんから。今は博士コースを持っている大学は他にもあり、東北大学は目立ちませんが、最初の何年かは非常に目立ちました。東大の卒業生で、本省の役人で、この東北大学の専攻のドクターという人は結構いますよ。

8. 生命科学研究科の立ち上げ

阿部：生命科学研究科を作るのに、非常に苦労したんですよ。

A：はい。少し漏れ聞いておりました。

阿部：西澤総長の時代に作るようになって、さんざん議論した上で頓挫したんですよ。その時の委員長が加齢研所長の渡辺民朗さんで、私が総長に就任する1週間ぐらい前に、その生命科学研究科の設置構想委員会だか設置準備委員会だかで、いったん中止することを決めました。私は関与してないですよ。ところで、遺生研（遺伝生態研究センター）というのがあったのを覚えてます？

N：はい。

阿部：遺生研が、翌年か2年後かに任期が来るんですよ。

N：はい、設置の任期ですね。

阿部：設置の任期。それまでに生命科学研究科を作らないと、遺生研の任期を越えてしまい、遺生研の組織が宙ぶらりんになってしまう。それでは遺生研が困るので、西澤総長の任期の最後に、当分この生命科学研究科の検討を中止して、遺生研の改組に力を尽くすということになったんですよ。渡辺民朗さんは、西澤先生の片腕のような人で、それで私が総長になった時に、これは懸案事項で、私が宿題として、西澤先生の後を引き継ぐことになっていました。当時の研究所は名前や目標を変えないと、なかなか本省がイエスといわない。中身を変えて、例えば抗酸菌から加齢研に変えるとか、そういう時代です。だけど遺生研は、そのままの名前にして

もらったんです。次に生命科学研究科にするという含みでね。

ところが非常に困ったのは、本省が、東北大学に生命科学の研究者はほとんどいないということを出して、それで実際には、理学部の生物学科に藤井という有名な教授がいて、この人1人ぐらい。あとは医学部にもいない。それが本省の認識です。生命科学って、当時は臨床などは別で、遺伝子とかの世界の話ですからね。今は、臨床も遺伝子の世界ですけど。

で、本省は、生命科学研究科を東北大学につくるのを認めてくれないということで、そういう事務的な報告が総長に上がってきたわけです。これは困ったと、渡辺民朗さん、もう定年になって岩手県立大学に行っておられて、仙台に帰ってこられたときに一、二度お目にかかって、どうですかと聞いたら、渡辺民朗先生も、東北大学には人材がないと言うんですよ。いないのに作ろうと。非常に苦労したのは、当時の農学研究科長が消極的なんですよ。農学研究科から人を出すのが嫌だという。

A：ああ、そういう意味ですね。

阿部：だけど、西澤先生以来の宿題だし、作れば頑張ってくれると思うので、かなり無理をして作りました。だから今、もっと頑張ってもらわなきゃいけないのですが、どうですか。

A：生命科学分野は昔と比べると、すごく良くなってると思います。私のような外部から見ればですが。

阿部：ああ、そうですか。それはありがとう。

9. 青葉山の土地問題

阿部：東北大学は土地の問題で非常に神経を使った。青葉山の工学部は、東北財務局の所有になっていたのは知ってますか？

A：その話は、聞いたことがあります。

阿部：大学によっては土地が大学の名義になってる所がたくさんあるのですが、東北大学の場合はキャンパスや場所によって、所有者が財務省（東北財務局）なんです。私は学部長のときから、何とか東北大学の土地にしたい。別に財務局の土地だからといって、借用料を取られてるわけでも何でもないです。実態は東北大学の名義であろうと、財務局の名義であろうと、国立大学時代は変わらなかったわけですが、法人化を前にして、将来的に大きな問題が起きる可能性があると思った。

A：意外にも盲点になっていたのですね。

阿部：何とかしようと言ったんですが、事務的交渉では、東北財務局は全く頑として首を縦に振らなかった。よくあるケースです。それで、私は何とかしなければと思い、当時の事務局長に、行政的な努力をしてもらわなければいけないので、あなたの責任でとにかくやってくれと頼みました。彼がやりますと言うので、それで100周年までに間に合って、非常に良かったと思います。100周年の寄附では、東北大学は色々な理由であまり集まらなかったのですが、この財務局から東北大学に移管した土地を金額にしたら、ものすごい金額ですよ。非常によくやってくれたと思います。

この件は財務省と掛け合わない駄目なんですよ、霞が関。工学部は、別に財務局の土地だろうと、大学の名義であろうと、あまり気にしなかったですね。私は前からものすごく気になって、学部長のときから、言っていたんだけど。

それからキャンパス移転は、皆さんご存じのように、私の在任した6年間は調停と裁判でした。前任の西澤総長の時期は新聞が盛んに取り上げたようですが、新聞は裁判段階に進むと、もう取り上げないんだね、ほとんどね。調停とか、裁判があったことは取り上げますけれど、それ以外の動きはね。非常に私も苦勞しました。御存知だと思いますが、青葉山のゴルフ場の会員というのは、仙台の大手の旦那さんが多いんですね。仙台の財界、その他ね。それで浅野知事は、県がお金で損しなければいいっていう立場で、東北大学のキャンパス移転を進める側に立ってくれたんですけども、あんまり急がない。

10. 言語文化部の廃止

阿部：言語文化部の廃止は、西澤総長の時に教養部改革をして、国際文化研究科とか情報科学研究科を作り、言語文化部だけが大学院を持たない組織になって、西澤総長は非常に怒ったらしいのですよ。教養部の文系の先生全体が、大学院組織に移行するプログラム（改革案）を認めなかったんです。西澤先生のときからの、事実上の宿題。それで、言語文化部を廃止するのに随分苦勞しましたが、当時の所属教員の大部分は、国際文化研究科に移られたと思いますけれども、皆さんからご覧になって、今どうですか。相変わらず何か問題を抱えていますか。私は、とにかく大学院を持たない組織をつくるのは良くないと言って廃止してしまったので。ただ、そこにいる先生を誅首したわけじゃなく、配置換でした。文学部へも何人か来たんじゃないですか。

S：分属で何人か、文学部にも来たし、他の文系学部にも。国際文化に移った方と、東北アジア研究センターに移った方が割合多かったです。二転三転があったみたいな話は聞きましたけれど。

11. 入試改革

阿部：うまくいかなかった例の一つは入試改革。今でも問題かもしれませんが、私が工学部にいるときに、アメリカ型の入試制度を作ったのです。この制度は、学部長会議で評判が悪くて。私が評議員や学部長になる前の話ですよ。アメリカ型の入試ってというのは、ご存じかもしれませんが、SATっていう大学共通、大学入試センター試験みたいな共通試験が1つと、それから2番目が高校の成績、3番目が高校時代のスポーツ・芸術・社会貢献などの活躍と、だいたい3つ。それに、著名私大は面接を取り入れている。それらで選考する。筆記試験、しかも大学入試センター試験みたいな、ああいうのだけでは選考しないのです。ハーバードなど、どんなに成績が良くても、筆記試験だけでは通らないし、州立大学でも通らない。大学入試センター試験みたいなのでいくら成績が良くても、それだけでは取らない。

色々な理由があるんですけど、筆記試験は能力の一部にしか過ぎないと考えている。しかもアメリカに根強いのは、筆記試験ってというのは親の収入への依存度が非常に大きい。日本でも、東京大学の学生の親は非常に裕福なんですよ。それで、そういう裕福な人が通ることになってしまうと。それから平たく言えば人間力ですよ。だからスポーツとか社会貢献とか、ピアノとかそういうのも良いのですけれど、高校でそういうので非常に活躍してる人は、加点されるわけですよ。そこで私も、そういうやり方の入試を、工学部に作ったのです。その時に、推薦入学ですから、高校の校長からの推薦というのを義務化したんです。人数が少ないこともあつ

て、うまくいきまして、後の追跡調査の結果が非常に良かった。工学部では筆記試験をせず、面接と、あと文章を書かせたかもしれません。問題になるのは、高校の入試をどう評価するか。学力水準の異なる A 高校と B 高校と、同じ10番だったら、どっちを通すか。B 高校だと1番でも入らない可能性もあるとか、そういう議論があったので。これは全くもっとも議論なんです。データを何年か積み重ねると、だいたい分かるんですよ。ノウハウの蓄積みたいなものです。それを私が総長のときに、AO 入試に変わって、私に相談なしに校長の推薦が無くなったのですよ。

A：そうでした。

阿部：この差は、ものすごく大きいんですよ。校長の推薦を何故残せなかったのか、当時の入試委員長に言ったのだけれど、もう遅すぎた。もっと早く言ってくれば、私は文科省に言って、これは残してくれと言えたのだけれど。これは半分、中途半端になったことですね。ですから、必ずしもうまくいかなかったものの一つです。

12. 総長特別補佐と副総長

阿部：東北大学に運営諮問会議というのを、法人化前の国立大学時代に作りました。当時の藤井（黎）仙台市長に議長をしてもらったんですが、例えば後で賛成派になりましたけれども、キャンパス移転問題反対派の人とか、そういう人うるさい人をいっぱい入れて、あと東北大学の名誉教授、西澤先生とか増本（健）先生とか、厳しい人。うるさい人をいっぱい入れると非常にプラスになるのは、私に対して色々、もっとちゃんとやれとかっていうのを言うわけですよ。だけど、それでだいたいその間に、反対派の人みんな賛成に移ってくれたの。それから総長特別補佐を作ったのは覚えてるでしょ。

N：はい、そうですね。

阿部：で、Iさんと、それから法学部の法制史の。

N：K先生ですか。

阿部：当時、京都大学と東北大学が、総長特別補佐がなかったのかなあ。東大はかなり早く作っていた。それで西澤総長の時に、学部長会議か評議会に委員会を作って、議論したんですよ。私が総長になってから答申が出てきた。まず、総長特別補佐を置けと、答申にあるわけ。それで私は、じゃあ置きましょうということになった。そうしたら西澤前総長が、何で置くんだって言うわけですよ。西澤先生は、補佐は要らないと思っている。「先生そんなこと言ったって、先生のとときに正規の委員会をつくって、こうやって答申して、ちゃんと手続きを踏んで重みのあるものですから、無視は出来ませんよ」と言ったところ、西澤先生は「君に悪いことしたなあ」って、まあオーケーしてくれたんです。

特にKさんの特別補佐は、非常にプラスになったのは、これどういうことかということ、私が評議員、学部長、総長になった頃までは、法学部長と法学部の評議員がうるさいんですよ、一番うるさい、学部長会議とか評議会だね。別におかしいことを言ってるのではない。おかしいことを言っているわけではないのですが、石田名香雄先生（第15代総長）の頃でも、法学部長の意見がうるさいもんだから、意見をよく聞くんですよ、学部長会議でも評議員会でもね。Oさんっていたでしょ。

A：はい、O先生。

阿部：Oさんって、刑事訴訟法の大家で、学生問題なんかだと、非常に厳しい。執行部を批判するものだから、歴代総長はだいたい法学部長の方を向いていた、特にOさんに。ところが私は例外的に、Oさんとの関係が良いのですよ。これは雑談で恐縮なんですけど、Oさんって、私の2つぐらい年上かな。ものすごい論客ですから。大谷（茂盛）先生が亡くなって吉永馨先生が代理の頃だったか、Oさんが、うるさいことを仰るんですよ（補足：在任期間は1989年5月～1990年9月、吉永事務取扱が1990年10月1日～11月5日）。それで時の議長が、Oさんに色々と意見を聞く。そうでなくてもOさんは滔々と喋る人だ。それで、工学部の評議員ってのは通常ほとんど発言しないんだけど、私1回だけ発言したんだよ、手を挙げて。法律、要するに刑事訴訟法ではどうだと、議長がそんなことを聞くわけですよ。自分の部屋に呼んで聞くのならいいけども、評議会の席でね、それはおかしいと。評議会っていうのは法律論をやる場所ではなく、法律は詳しく知らない人が集まって良識で論じる府なんで、法律論をする場所ではない。だから法律論で、学生の処分を云々するのは評議会になじまない、というのを1回だけ言った。そしたらOさん、今までの意見を全部撤回して、阿部先生の方が正しいと。その後Oさん、会ったことはないんだけど、人の噂によると、私は非常に信用を得ているのですよ。まあ、法律論も必要ですよ。必要だけど、そうすると法学部の先生の意見ばかり聞くことになる。

A：そうですね。

阿部：ちょっと話戻りますけど、東大は学部長会議のトップは法学部長で、特別。要するに一番ランクの上の学部長になってんですよ。

A：はい。

阿部：東北大学は、そうっていないじゃない。文系は文学部長から、理系は理学部長から。どこの大学でも法学部はうるさいんだけど、東北大学は特にうるさかった。私は関係してないんですが、私が評議員の前後に答申が出て、文系からさっぱり総長が出ないのはおかしいっていうんで、何か報告会やったの、覚えてますか。ところがそれで、西澤先生の子の総長、私は文系から出すべきだと思ってたのに、全然出てこないんだ。

それはともかくとして、Kさんっていうのはたまたま、私の同期生ですから。学生のころは知らないですけども。それで彼に特別補佐、その後副総長になってもらった。その頃から法学部は協力的ですよ、総長に対して。私が総長になったころは、まだ駄目でしたが。それであるとき新幹線で、Sさん（名誉教授）って知ってますか。

A：はい、法律を学ぶ人はどこの大学でも、たいてい知っています。

阿部：Sさんって、有名な民法学者のね。新幹線でご一緒した時に、「最近、私は法学部にもものすごく助けてもらってます。どういう訳か昔と違って、総長としては、ものすごくやりやすくなってます」って言ったら、S先生ぽかんとして、「君、そらそうだろう。今まで、大学の管理運営から法学部を離しておいて、外に置いてたから、そうなったんだ。中に入ってりゃ、協力的なのは当たり前だ」と。総合的に見て、私は総長特別補佐制度を作った良かったと思います。

それから、副学長制度になったときに、非常にややこしかったのは、あの当時は、副学長を指定職にしないと2種類の副学長を作ったことになるので、全部を指定職にしなきゃいけない。そうすると、東北大学に指定職のポストっていうのは、限られているでしょ。本省は新たな指定職を1個しかくれないんですよ。それでも、とにかく副学長を何人かつくろうということに

なり、総長特別補佐のうち、Kさんに初代の副総長になってもらって、あともう1人は、指定職の学生部長になった。

私の方針として、総長特別補佐もそうですし、副学長もそうですが、工学部からは出さない。身内から出すように思われることを避けたい……身内って言っても、工学部は規模が大きいから、実際は身内ということないんだけど、身内から出すと思われるのは非常にマネジメント上良くない。それで、工学部から出さなかったんですよ。最後に、H先生だけが例外になっちゃった。あれは高等教育開発推進センターの長をしておられて、それを副学長にすることになった。彼、工学部ですが、有能な彼がやめて、ほかの人にすると、要するに勤務評定でバッテン付けたことになっちゃうんですよ。しかも任期が途中でしたので。それで、彼だけが最後に、例外的に工学部出身なんです。ただ、他の総長はあんまりそういうの気にしないね。私は気にするんですよ。自分の出身母体から、副学長とか理事を出すっていうのはいかがなものかと思うんですけども、あんまり気にしない方がいいのかもしれませんが。まあ、別に問題起きてないでしょうから、気にしなくてもいいかも。

13. 大学教育開放センター

阿部：1つ失敗例を言いますと、教育学部にあった大学教育開放センターというの、覚えていますか。

(補足：正式には2000年度までは教育学部附属、大学院重点化後の2001年度は教育学研究科附属、2002年3月末日に、2002年4月からの大学院教育情報学研究部・教育部の発足に伴い廃止)

A：はい。

阿部：あれを国につぶされちゃったんですよ。放送大学を作るために、教育学部に置いとくのは駄目だと。それまで補助を出していたのが、一極集中にするため、一円も出さなくなった。これは本当に、教育学部に申し訳なかったし、東北大学としても残念なんです。日本の政府のやり方というのは、だいたい大きい組織をつくったら、それに関係ある小さい組織の代替ということで、無くす方針なんですよ。だから、残すのは非常に難しかった。例えば世界一速いコンピューターをどっかに造るといって、大学のコンピューターの予算を減らすことを考える。そういうふうに、選択と集中の基本方針なんですよ。それで、私が国家権力に負けた。教育学部には全く申し訳なかった。そういう多様性っていうのは、日本は非常に乏しいのですよ。それで最後に、寄附だけでやろうとして、1年か2年頑張ったけれど、教育学部の目玉だったんだけど、誠に残念である(補足：1999年度および2000年度については学内企画として実施)。もちろん全国みんなそうですけど。そういうのを、どこかに国に、さっきの東大の産学連携センターの例みたいに、そこを拠点にして、全国をカバーしようという、そういう方向の極端な例が放送大学ですね。これは残念で、教育学部には誠に申し訳ないんだけど、私の力では、いかんともできなかつたね。

14. 病院の併合

阿部：比較的うまくいった例は、病院の併合。皆さんから見るとどうですか。

A：良かったと思いますよ。医学部と歯学部の間もちょっと溝がありましたからね。

阿部：東大は今でも、医学部附属病院なんですよ。別に医科研っていう大きい、昔の伝染病研

究所。そこは病院を持っていて、医学部附属病院と統合していませんね。

肺移植などする加齢研の病院を本院と統合しようとしても、医学部附属病院として医学部の傘下に置くというのは、加齢研はイエスと言わないです。歯学部のこともありましたけどね。歯学部や加齢研から見ると、その目玉の臨床部門を、医学部に乗っ取られたという怨念を持ちちゃうんです。しかし東北大学はやらざるを得ない。病院は全学の病院になっちゃいましたから、財政規模とか人間の規模からすりゃあ、医学部より大きいんですけども、医学部の附属病院としての方が、筋が通るのかもしれませんが。非常に私は悩みましたけども、まあ、統合という選択肢で、皆さんオーケーしてくれた。

15. 環境科学研究科など

阿部：環境科学研究科は、私の在任中に準備を始め、出来上がったのは私の任期切れの直後ぐらいですけど、これは皆さん、どう思ってますか。関心ない？

A：外から見ると、時宜にかなったとても良い研究科が出来たと思いますけど。

阿部：もう少し目立ってもいいと思う。

A：そうですね。そういう意味では。

阿部：環境科学、環境問題っていうのは、ものすごく目立つ分野ですからね。工学部からも随分、人と専攻を出してますからね。例えば資源工学専攻なんてなくしちゃって、こっちへ移しています。それから情報シナジー機構はどうですか。

N：シナジー機構って、たぶんもっと大きな構想だったのかと思うんですけど。実態はどうなっているのですかね。

阿部：図書館長っていうのはいるんですか。

S：図書館長とシナジー機構長は別にて。現在図書館長は、理事が担当することになっていて、U先生がやっていますけれども。

阿部：私が、ちょっと心配してるのは、確かに情報、IT時代ですので、図書館のような、まさにITの技術を利用するのに適した分野ですが、昔からのいろんな、ITと関係ない職員も、たくさんいると思うんですよ。ITの不得意な方々がどうなったかなと思って。改革っていうのは、形も大切ですけども、実態を良くする面が同時にないと、うまくいきませんから、そこを私は心配してるところです。それから大学教育センターは、今どうなってますか。

N：今は高等教育開発推進センターっていうセンターになっていますね。

A：そこに入試も入ってますよね。入試センター。

S：教育に関しては、非常に力強く推進してるみたいな様子がありますね。

A：学生さんにとっては、非常に評判がいいようですよ。基礎ゼミっていうんですか。少人数ですけども、他の学部の学生さんと一緒に授業で、親しくゼミ形式でできるということで、学生さんはもちろん先生も、何か皆さん生き生きとやってるようですが。

(補足：高等教育開発推進センターは2014年度に他の学内機関と共に「高度教養教育・学生支援機構」に改組・統合され現在に至っている)

16. 医学部関係

阿部：医学部に、先進医療開発コアセンターっていうのをつくったんですよ、私の総長時代に。

これは医学部長が全然乗り気でなくて、吉本高志さんが病院長の時、病院を視察に行ったら、そういう話が出て、うまくいかない。病院の後、医学部長室に行く視察ルートの中に入っていたので、私は今から医学部長室で話してやるからって言って、それで一緒に行き、医学部長は別に反対も何もしてないんで、作ることになったんです。

ところで皆さんご存じかもしれませんが、旧帝大の医学部で、所在都市に医学部が1つというところは、他にどこにもないんですよ。旧帝大でなくとも、岡山とか金沢とか、ああいうところも、複数の医学部があるんですよ。

A：そうですね。そのことの重要性を、仙台の地域自体が無頓着というか…

阿部：複数の医学部があれば、若干役割が違ってきます。例えばの話ですよ。京都に京都府立医科大と京都大学があって、冗談で、京都大学総長だった井村（裕夫）先生は内科ですけども、僕は病気になったら府立大学にするという。冗談ですから本当にそう思ってるかどうかは別として、要するに一般的な医療については、京都大学よりも府立大学の方がいいと。京都大学の医学部は、研究者は山ほどいるけど。世界と競争していくためには、旧帝大の医学部は、そういう役割を負ってるんですよ。京都なんかはうまく、その2つの大学で、何となく役割分担、何となくね。東北大学も、創立の頃から昭和30年代までは、研究第一主義の教授を非常にたくさん採ってます。ところが地元のニーズは必ずしもそうじゃないんですよ。

A：あ、そういうことがあったんですね。

阿部：東北大学医学部が気の毒なのは、その地域医療の……京都で言えば、京都府立大学のやっていた役割も、京都大学のやっていた役割も、両方負わなきゃいけない。これは非常に辛いことです。私は前から、仙台に医学部をもう1つ作れということを言っていました。最近、3.11後の復興政策のおかげで、少しいい方向に来てますが、私はその前から、村井（嘉浩・宮城県）知事に、医学部を作らなければ駄目だと言っています。医学部に直接言っていないのは、総長が言わないで、元総長の私が言うのは問題なので、私は外野で応援するべきなのです。それから当時の医師会長に、医者は余っているのか聞くと、余っていない、足りないって言うんです。だけど、医学部を1つ作るのは多過ぎるかもしれないとか言ってましたけれど、とにかく彼は反対はしないと。今の医師会長は反対してるみたいだけれどね。けれども、よく話せば解決できる。やはり東北大学の医学部は、もっと先端、先進医療とか、ノーベル賞取るような研究を重視しないと、そういう役割は当然あるわけですけどね。

熊谷岱蔵先生なんて、彼はインシュリンの発見者ですけども、タイミングが悪くてノーベル賞もらえなかったけれど、結核の治療で、医療に関してはすごい貢献をしている。両方できる人もたまにはいる。

これも裏話ですけども、I先生（元総長）に怒られたことがあります。何を怒られたかっていうと、彼は医学部長のときに、医学部の助教授で、東北大学の教授には研究業績の点で向かない人をよその大学へ出した。私が学長の間、その何人かを医学部へ戻したというのです。そんなことないのだけど、怒られた。I先生は学者ですから、学問的基準で東北大学の教授を採ろうという意志が非常に強かった。伊藤貞嘉教授やO学部長は学者だし、I先生の後任のS教授。彼も学者で、最近では学者が増えているようですけどね。やっぱり、何か応援をしてあげなきゃいけない。先進医療開発コアセンターなんてその1つで、発展的に大きくなっていけばと思いますがね。

それから医工学研究科は、私は手掛けておりません。外からはだいぶ応援しました。私政府にいましたんでね。これ皆さんから見てどうですか。

A：これができたときは、私はものすごく嬉しかったですね。東北大学らしい強みを生かしたものがやっとできたなあと。ここから何か、先端的で臨床にも貢献できる突破口ができるかなと思っていますが、実態はどうなんでしょうかね。

阿部：非常に期待っていうか、国も期待してるし、画期的な取り組みです。

A：そうですね。

阿部：画期的なんですけど、世界的に見ると、アメリカなんかでは、もうとっくにあるんですよ。1つだけ例を話しますと、ジョージア工科大学というのがアトランタにあって、これは州立大学です。あそこにエモリーって、私立の医科大学があるんですね、結構有名な大学。この2つが一緒になって、メディカルエンジニアリングのコースをつくったんですよ。ものすごい人気があって、アメリカにはそういうの幾つかあるんです。アメリカが、非常に上手なのは、最初は民間の財団からお金をもらって準備をして、見込みが出てくると国が補助したり、そういう仕組みが発達しています。アメリカの工学部というのは、アメリカ人にあんまり人気なくて、だいたい私の年代より下は、東欧とか、その後だと中国とか、そういうとこの出身者が多いんですよ。学生もそうなんですよ。

A：はい、そうですね。

阿部：学生も、留学生も。ところがそのメディカルエンジニアリングだけは、80%以上がアメリカのネーティブ。

A：米国人が。

阿部：米国人。それで、非常に人気高いんですよ。それだけ将来があるということだと思います。だから世界的に見ても、うまくやらないといけないね。分かりやすいのは、整形外科なんていうのは、MD (Medical Doctor, 医師免許を持つ医学士)、要するに医者教授は1人しかなくて、あと研究はほとんど Ph.D. (Doctor of Philosophy, 学位取得者) がやっている。彼らは莫大な収入を得ている。給料だけでなく、他のインカム (収入) もある。

17. 多元研と WPI (世界トップレベル研究拠点プログラム)

阿部：研究所の統合は、皆さんから見てどうですか。

S：多元研 (多元物質科学研究所) ですか。

阿部：あまり興味ない？

S：2年に一度、「片平まつり」という行事 (片平地区などの研究所等が秋に実施する一般市民向けの公開事業) があり、私も実行委員だったので多少の話を聞きます。統合したことで、以前の垣根みたいなものが、あまり無くなってきている、改革が効果を出してきているような様子は聞きました。

阿部：多元研は2001年に、昔の科学計測研究所、非水溶液化学研究所と素材工学研究所、3つが一緒になったのですが、別に特別心配しているわけではないのです。ただ、外から見ると、名前だけからだ金研 (金属材料研究所) と重なるところがあるんですよ。旧素材研も金研も、物質科学を扱っている。

N：そうですね、金研の名称の中に「材料」がありますね。

阿部：研究所の目的は重ならないようになってはいますが、実際は極めて近いわけです。それから金研が以前のようなではありません。これはごく最近のことですけどね。それで少し心配しています。ただしこれは、私の総長時代を基準にした話。あの時代の金研は世界の金研、ついこの間まで。その後、マテリアルサイエンス全体なんですけど、MIT（マサチューセッツ工科大学）とかヨーロッパの大学も、マテリアルサイエンスが、今、みな下降気味なんです。その理由が非常に陳腐で、私は大変残念なんですけれども、マテリアルサイエンスっていうのは、金を食うのですよ、実験のときに。電気料だって莫大に掛かっていた。それから、色々な計測機器も、高額のものを使います。それでMITなんかも、資金をつぎ込んで材料開発とかやってきた割には、役に立つ新しい材料があまり生まれてない。お金を掛けただけのことがない、という評価が世界的に広がっちゃってね。それで工学部の材料系も、ダメージを受けているんです。そういうのが一方であるものだから、多元研で良い仕事をしてる先生はいますけど、金研と一緒になるとかいう話が、外圧として出てくる可能性もないわけではない。そういうのは聞いたことないですか。

S：ないです。

N：我々、なかなかそういう情報には接しないんですけども。

阿部：じゃあ、今のところ大丈夫ですね。何しろ東北大学のマテリアルサイエンスは、数年前まで世界一だったけど、今世界一じゃないですから。

S：どこが世界一なのですか。

阿部：中国だね。アメリカが2位。それからWPI（文科省のWorld Premier International Research Center Initiative世界トップレベル研究拠点プログラム、この場合はそこに採択された東北大学のWPI-AIMR原子分子材料科学高等研究機構）への評価はどうですか。

A：あるのは、まあ、分かって、期待はしてるんですけど。

N：具体的な成果については、よく分かりません。でも、積極的に色々動いているのは、我々にも情報は入って、アピールは入ってきていますけれど。

阿部：WPIは、私が総合科学技術会議にいる時に作ったので、非常に思い入れがあるんですけども、私が作った時の趣旨とはだいぶ違うんですよ。

N：そうですね。どういうふう違うのですか。

阿部：私の作った時の趣旨は、日本の大学は、どうも世界に通用しない。通用しないっていうのは、研究者が通用しないわけじゃないんだ。研究者は優れた、ノーベル賞候補者もたくさんいますしね。優れている人がたくさんいるんですけど、問題はシステムですね。例えば、中国から日本の大学へ留学するのと、アメリカの大学へ留学するの、アメリカの大学に留学する方ははるかに楽ですよ。楽っていうのは、留学生を受け入れる体制が、アメリカは各大学とも、きちんとできていますからね。それから、留学生がアメリカでPh.D.を取得し、優秀な学生がアメリカで就職する道も、日本なんかと比較にならないぐらい開けてますから。

だからそういうことで、ちゃんと世界に通用する研究も教育も、将来構想も含めて、とにかく世界に通用する大学を、日本に30ぐらいは作らなければいけない。30作るためには、候補も含めて60か70作らなければ駄目なんです。30だけ作ったら、その2割とか3割しか世界に通用する大学が出てこないんでね。ところが、総合科学技術会議は、具体的な概算要求をするとこじゃないので、文科省と財務省と色々交渉しているうちに、今6つかな、日本で、WPIは。

A：はい、6つですね。

(補足：2007年度採択が東北大学を含む5拠点、2010年度に1、2012年度に3追加)

阿部：6つですか。それで、しかも特定分野に限定されているんですよ。

A：はい、はい、そうです。

阿部：で、あれは、当初の趣旨じゃない。

A：そういう意味で不十分ですね。

阿部：もちろん強いところをアピールして、そこから引っ張っていってもらおうというのは悪くないとは思いますが。

私は、今政府にいないので。私が総長のときは、さっき言ったような国の、もう大学の改革をしなければいけないという意識が少しずつ高まってきたところで、東北大学の教授の先生方も危機感を抱いてくれたこともあって、他大学に遜色ないぐらい、いろんな改革ができたのです。しかし改革っていうのは、繰り返しになりますけれども、形を作って終わりじゃなくて、どういうふうに入魂を入れていくかがもっと重要なんでね。その後いろいろ、私の後で発展的に動いているものも幾つかあるようですから、頑張ってもらいたいと思っています。

18. 大学の世界ランキング

阿部：東北大学は、世界ランキングがあんまり高くないんですよ。物差しを合わせないと、どうしても高くないところもあるし。

A：物差しといえば、例えば中国の上海交通大学ですか。あそこでランキング作りを、自分たちでやり出しましたね。そういうところは、中国はとても戦略的だなと思います。日本が、なぜそういうことをできないのか、こうすれば自分がリード出来る、鼻面を自分たちが動かせるという、非常に戦略的な。やはり中国人は、そういう目のつけどころが、すばらしい。日本は何か、いつも従うだけのような感じがします。先生、いかがですか、科学技術。

阿部：そのとおりで、日本で物差しを作って、それで世界の大学を、その物差しに当てはめてランキングを作るというのは、あってもいいと思いますが、どうなんだろうね。日本でやるとすると、どこかのシンクタンクみたいところに金と人をつぎ込んで、勝手にやって下さいということをやればできるかもしれませんが、結構日本はうるさいところがあって、そういう物差しでは旧帝大ばかり有利ではないとか、私学がさっぱり入っていないとか、小規模大学に不利になるとか、そういうことをギャンギャンギャン言って、だんだんだんだん骨抜きになる可能性が、日本社会にはあるので。そういう日本国内の圧力に耐えて、どこかの機関でやるとすれば、毅然としてやってもらいたいですね。どうしてもポリティカルになるのですよ。それをどうするかですね。

A：上海交通大学が作ったランキングの中では、日本の大学は、比較的、他のランキングに比べれば高いですね。

阿部：それは、日本の大学全体でしょ。

A：はい。

阿部：工学部というのではなくて。私は、改革が目的だとは思っていませんけれども、もし可能であれば、やはり世界的に通用するようなシステムにしたい。恐らく明治の、帝国大学を作った頃は、欧米そっくりではないですけども、結構欧米のスタンダードに沿ってやっています。

そのころは人まねの時代ですから。だんだんだんだん、やはり日本の国内事情で少しずつズレてきて、例えば高等教育制度は単線主義になっていますよね。高専を除くと、戦後単線になってしまった。そういうのはやはり、ダイバーシティ(多様性)を重んずる先進国に比べると、労働も大切ですけども、価値観を一つにしてしまうというのが良いのかどうかっていう問題ですね。私は最近の東北大学を知りません。もう東北大学を離れて11年になりますから、浦島太郎です。

A：先生、いやいや、そんなことはありませんが。東北大学から離れて、向こうから見られると、東北大学はどう見えておられますか。

阿部：だいたいそういう目で、今日はお話ししましたけどね。頑張っていると思いますが、学生の評価も、結構日本の国内ランキングでは高いようですね。そうですが、やはり世界の研究大学と比較すると、色々な意味でまだ不足してるような気がしますね。例えば私は、現役のときからよく話していたのですが、世界の著名大学というと、例えばハーバードとかスタンフォードとかケンブリッジとかオックスフォードとか、そういう大学がずっと出てくるわけですが、そういう大学は、東大よりかなり小規模ですよ。東北大学と、あまり規模が変わらないですよ。何を比較するかによりますけど、学生数とか教授の数とか、研究者の数とか、色々そういう大雑把な比較をするとね。以前から言っていたのは、あまり論理的ではないのですが、何か適当な大きさというのがあるのかなっていう気がするんです。東大は、やはり少し大き過ぎますよ。東大出身者の前で、東大は大き過ぎますねと言うのは失礼に当たると思って、あまり言ったことはないのですが、先ほど話の出た遠山敦子さん(元文部科学大臣)、東大法学部出身ですけども、たまたま遠山さんの前でチラッと言ったら、彼女は全くそうだと言って、最近大き過ぎると。彼女の言う大き過ぎるといのは、東大の大学院に、他の大学を落ちた人が結構入ってきて気に食わないんだ。

S：最近そうですね。文系もそうだと思いますよ。大学院重点化で枠が広がって、かなり入りやすくなったと言われている。そうですね？

N：うん、そうですね。

A：そういうことは、東北大にも言えます。

阿部：東北大学も入りやすくなったと。

S：学部はそうでもない。大学院も、全部じゃないんでしょうけど。

阿部：文学研究科なんかどうですか。

N：まあ、ましな方かもしれないんですけど、歴史的に見ると、やはりそういう方向に変わってきていると思います。入りやすくなったという。

19. 改革のために

阿部：私の話は浦島太郎みたいな話ばかりになっているのですが、今、国立大学をめぐる状況というのは、大変厳しい。私立に対して厳しいというのは、学生の集まらない、定員割れしているところが苦しい。私立の上の方の大学は、定員割れはないと思います。国立は財政的な点だけを考えても非常に厳しいので、これからどうしていったらいいかというのは、非常に大きい課題だと思います。

私も、里見進先生が東北大学総長に就任したときに、一応そういうお話はしています。政府

と対立すれば良いというのではなく、政府によく理解してもらって、場合によっては説得して、東北大学が先頭に立って改革をやらなければなりません。日本の大学はだいたいやらない。東大は、先ほど言ったように、結局は国が、東大を悪く扱わないですから、楽なんです。

私は、教授会が頑迷固陋のために改革ができなかったという記憶は無いんですよ。東北大学は今、部局いくつあるんですか。10～20ぐらいあるんですか。

N：そうですね、はい。

阿部：その中には、頑迷固陋な教授会もありますよ。ありますけれども、そういうところばかりあるわけじゃないですから。学長に権限がないから改革ができないとか言ってる学長は、どういうもんなんですかね。私は、恥ずかしくないですかと、いつも思ってますが、政府はそういうのを非常に取り上げるのですよ。政府としても、学長に権限がある方が、大学をコントロールしやすいですからね。以前の国立大学みたいに、学長に実質的権限がほとんどないのは困らしい。

東北大学は、法学部の広中俊雄という教授が書いたレポートが紛争時代に、管理運営の基本になっていました。一つの教授会が反対すると、なかなか決定できない。けれど、議論すれば進むことは幾らでもある。むしろ、旧教養部は大変だったと思いますよ。評議会とか学部長会議に出てくると、ギャーギャー言われて、教養部の教授会に行くとギャーギャー言われ。もともと、非常にしたたかなことを言っている教養部長もいました。

それに比べ、私は、今の国立大学の学長は、すごい権限があると思います。例えばハーバード大学のサマーズさんって (Lawrence Summers)、財務長官した人。あの人は女性蔑視発言で辞めさせられましたけれど、普通ああいうところの学長は10年とかやるんですけど、短期間で辞めました。女性の話はきっかけにはなっているでしょうけれども、やはり教授会を説得できなかったことが原因ですね。例えハーバードだって、法学部を移転して再開発をやるなんていうことを考えると、法学部の教授会を説得しないとできないんですよ。それを、学長の権限だけでやるなんていうのは、ハーバードでも出来ないです。もちろん学長が、説得を頑張らなきゃ駄目ですけど。日本は学長の権限が、政府もその方が都合いいと見えて、少し大きくなっています。あまり感じないですか、総長の権限が昔と比べて大きいと。

A：阿部先生が最初におっしゃられた、総長先生次第で色々出来るんだということが。

阿部：政府も、いい改革は認めてやらないと駄目だというタイミングのいいときに、私が就任したせいもあると思うんですよ。ただ同時期に、何もやらなかった旧帝大もありますからね。そういう意味では、総長の努力もものすごく重要ですが、当時の評議会のメンバーとか教授会のメンバーに、危機感が、東北大学にはあったからできたんですよ。

A：ありましたね、そうですね。

阿部：危機感のある先生方が、相当いたと思いますね。ですからできたんですよ。

A：同窓生から見ても、大いに危機感を持ちました。

阿部：東北大学をもっと良くしようという、そういう教授が2～3割いれば、私は色々なことが出来ると思います。それがいなかったら、とてもできない。学長の権限だけでやるなんて、とんでもない。大学のオートノミーに反することじゃないか。大学のオートノミーっていうのは、学長のオートノミーだけじゃないですからね。

今の話は、この間少しヨーロッパに行ってきたんで、その影響もあります。ヨーロッパの大

学って、例えばイギリスでは、ケンブリッジとインペリアル・カレッジしか寄ってませんが、多様性がにじみ出てますね。すごく新しい産学連携みたいなことの方で、いろんな教育を作ったりしているのです。一方では非常にトラディショナルな、何十年も掛けないと成果が評価されないような、非常に重厚なテーマを。彼らに言わせると、最近はどうもせちがらいとか言っていますけれど、日本に比べると、まだそういうのが残ってるような気がしますね。

A：先生、最近私、そこの「さくらキッチン」で、食事中の先生方とたまたまお会いしてお話しすることがあるんですが、ある有名な先生が、最近、もう大阪大学の後ろ髪もつかめなくなっていました。そして後ろから名古屋大学が、もう抜き去ろうとしています。こういうお話を伺ったところなんです。

阿部：それは、ある意味で当たっていると思います。大阪大学は医学部がすごいんですよ。日本のライフサイエンス系の研究費が、私がいるときからそうでしたけど、半分以上占めています。医学部が強いが強くないかで、大学全体の研究費競争にすごく影響する。文学部が幾ら強くても、あんまり全体の研究費競争とは関係ない。全然関係ないことはないけどね。科研費なんかでは、件数が大切ですからね。お金を食う分野の教授が多ければ、金額も増える。

S：工学部には、全然かなわないです。

阿部：だけど件数は、お金を食わない分野の科研費も1件ですから、めちゃくちゃ食うのも…

A：1件ですからね、もちろん。

阿部：ニュートリノみたいなのも1件。そう言っておられましたか。

A：すごい危機感をお持ちでした。

阿部：名古屋大学は、私は非常によくやっていると思う。規模が少し小さいんですよ。戦争中にできた大学ですからね。

A：はいはい、そうですね。

阿部：それでも、非常に頑張っていてやっていますよね。同じような話を増本（健）先生が、現役の頃から言っていましたね。今、文科省の分類で言うと、4つの大学のしっぽで、何とか東北大学は頑張ってる。この4つの大学の中に入ったというのは、ここ10年とか、そういう数年の動きとしては、東北大学は非常に得をしていると思います。で、そのうち、おっしゃるように、名古屋大学かどっかに抜かれて、4番目から外へ出るようになると、急に駄目になるんじゃないですか。

大阪大学がだんだん離れていっちゃって、名古屋大学から追いつかれるっていう危機感を持っている教授が増えてくれば、東北大学は健全になると思いますけどね。そう思っていない人が、結構いますからね。例えば重粒子治療施設なんかは、山形大学が先に作っちゃったでしょ。

A：そのニュースを知って、信じられない思いでした。

阿部：東北大学の有力学部長経験者は、必要だとあまり言いませんでしたから。もっと陽子みたいな軽いものでも十分だと言って。そんな調子だったら、よそに持っていかれる。

A：そうですね。要らないって言うのだったら別に持っていくよ、というようになっちゃいますよね。

阿部：旧帝大だというので、少しあぐらをかいているところがあったんじゃないですか。今のO学部長なんかは、そんなことはないと思いますけどね。

私の現役時代に、非常に気にしたのは、医療短大の4年制化。あれも山形大学に負けている

んですよ。他の旧帝大でも、先行している所もありました。歴代の医学部長なんかはあまり熱心でないんです。遅れて始めてもいいんじゃないかっていう考え方もあるんですが、医療短大を4年制化して、大学院もつくとしますと、設置審にかけなきゃいけないでしょ。設置審にかけると、優秀な教授は、先に4年制化したところが持っていくんですね。

A：そうですね、よく分かります。

阿部：ですから、東北大学のブランドがあるから遅れても大丈夫だっていうのは、甘い考えですね。

A：そこですね。

阿部：結構、山形大学の4年制化でも、他の大学でも、短大を4年制化すると、どこも優秀な先生が囲われてしまう。

A：そうですね。実際にそういう事例を聞いています。

阿部：日本自体が、医療技術の歴史が浅いですから、看護師とかね。ですから、どうしても上澄みは、先に4年制化したところが引っ張って採用する。非常に私は心配しましたけど。

だから繰り返しになりますが、私は、昭和30年代までは、少なくとも東北大学の医学部は、非常に画期的な研究者がたくさんいたと思いますよ。吉田富三先生もその例です。

A：綺羅、星のごとくおられました。

阿部：うん。本川（弘一）先生とか。そういう研究第一主義の雰囲気ってというのは、理学部から出たわけですが、その次にできたのが医学部です。医学部でも濃厚に。その次が工学部で、その次が文系。当時の法文学部ですか。そこまでは、少なくとも研究第一主義が、人事に非常に出ていたと思うんです。やはり戦後、女専とか仙台工専とか、皆包摂して、そのころから大衆化が始まって、しかもGHQの指導のせいか、師範学校まで一緒になりましたからね。だから、これは御先祖様に対して失礼な意見を申し上げるかもしれないんですけど、当時、終戦直後、学制改革のときに、なぜ東北大学は頑張れなかったのか。後で、結局、宮城教育大学は分離してしまうわけですからね。短い間しか一緒にいなかったのです。やはり旧帝大の役割分担をきちんとGHQに説いて、そういうことを頑張れなかったのか。私が総長をしていたら、うまくいくかどうかは別として、相当頑張らざるを得ないと思っています。結局、宮教大が分離するんですからね。

A：まったくです。お互いに損でしたね。

阿部：まだ残っているなら別ですよ。（東北大学に包摂された）仙台工専は、明治の末にできているのですが（1906年仙台高等工業学校として創立）、あれは日本の各地に作った5つか6つの高等工業の1つで、非常に由緒ある歴史を持っていた。本当は工学部と、戦後一緒にしないで、独立させるべきだった。例えば名古屋だったら、名古屋工大の例もある。仙台工専は独立運動をしましたが、東北大学は冷たかったようです。

N：そうですね。

阿部：九州工大も。

A：そうですね。

阿部：仙台工専は、できたときは高等工業ですけど、名前は全国全部工専になったわけです。それでも盛岡の工専なんかは、ちゃんと独立して岩手大学工学部になっているわけですが、仙台工専は教授がほとんど事実上は離職ですからね。工専の教授で、東北大学工学部の教授になっ

たという人は…建築・土木が東北大学に無かったからね。

A：はい、なかったですね。

阿部：機械や電気では、仙台工専の教授だった人を1人ぐらい助教授で採用し、そのあと外に出していますからね。もし仙台工専が独立していれば、地域貢献の役割分担が出来たと思います。

やはり知恵を出さなきゃ駄目なんですよ。ただ反対、反対って言ってたって。もっとこうした方が、日本の国のためにいいですよって。

そういう意味で見ると、過去の総長先生方は、色々とその時点の状況に応じて改革がなかなかできなかった時代もあるかもしれませんから、一概にそういう目で、評価しちゃいけないんですが、やっぱり北條時敬先生（第二代総長、在任：大正2年5月～同6年8月）は光っていますね、そういう意味では。女子学生の入学実現も、澤柳先生（政太郎、初代総長）の方針をきちんと継続してやっておられたし、金研の基をつくったのもあの人ですね。

N：そうですね。

阿部：金沢行くと、四高の記念館がある。見たことありますか。

N：ええ。

阿部：北條先生は四校の校長で有名だったんですね。名前が燦然と残されています。西田幾多郎を育てたのも、あの人ですね。

N：そうですね。

阿部：数学者なんですけどね。あの人は何年東北大学にいたんですか。

N：4年ぐらいでしょうか。

阿部：ああ、4年ぐらい。結構長くおられた。

N：その北條先生が、ご退任される時の色々な引き継ぎの書類というのが、やはり史料館にまとまって残っています。まさに色々な懸案書で、金研のこと、工学部の教授の人選の話とかが載っていますが、非常に要点がまとまった形で残されています。北條さんの改革に対する姿勢っていうのが、分かるような資料ですね。

阿部：北條先生の次の人って、どなたですか。

N：福原鎌二郎（在任：大正6年10月～同8年6月）っていう官僚ですね。

阿部：その人、あまり長くいなかったんですか。

N：そうですね、2年ぐらいじゃないでしょうか。

A：その後になるんですか、例の小川先生ですね。

阿部：息子さん、金研（金属材料研究所）の教授でした。知ってますか。

N：はい。四郎先生でした。直接は、存じ上げないんですけど。

阿部：私は1回だけ、ご尊顔を拝したことがありますけども、帝国大学の権化みたいな人です。面白かったです。私、教授時代に、金研から講演を頼まれました。金研は毎年1回、名誉教授もお呼びして講演会を開いていたんですよ。その後パーティーになったら、小川先生は、車椅子か何かに乗ってたな。それで当時の教授って、私が講演したときの教授っていうのは、私と同じかもうちょっと若い、前後の年齢の人たち。小川先生から見ると、助手か学生みたいな存在なので、何を言うかと思ったら、何で君たちは僕を所長にしなかったかとか。皆、戸惑っていた。私は部外者だから、まあ、面白くて。

小川四郎先生は、加藤陸奥雄先生（第13代総長）と、旧制仙台一中で同級生なんですよ。小川先生は4年で修了して旧制二高へ進学、加藤先生は5年かかった。ところが、「加藤陸奥雄君は学長になって、俺は所長にもなってない。君たちがしないからだ」とかって、ひどく怒っていて。

A：そうですね。4年修了でね。

阿部：いや、まあ、それは若いときの話でしょうけどね。まあ、帝国大学教授ですよ、あの人は。その後何年かして亡くなっちゃったけどね。現役の教授たち、私と大同小異の年回りの連中はみんな、何言われても、はー？とかって言って。教授の気質もどんどん変わってきますからね。

（中略）

阿部：まあ、色々なことを話していると、とめどなくなります。東北大学としては、政府と上手に仲良くしながら、政府の言うことは全部聞くということはしないで、頑張っしてほしいというのが結論。何か質問ありますか。

S：今でも北條先生のような形で、総長の引き継ぎ書類みたいなのが伝わっていくってことはないんですか。

阿部：私はしてません。していませんが、口頭では、吉本（高志）さんに話してますし、それから井上（明久）さんにも。今の里見総長には、メモも渡しているかもしれない。一番何も無いのが西澤先生。私が総長になる時に、引き継ぎの時間というのがあったんですよ。それで2時間か3時間、西澤先生から引き継ぎをされる時間を作ってもらったんですが、西澤先生は雑談をして、それが引き継ぎなんです。

S：そこでしか引き継げないことがある。

阿部：あとは自分で勉強しろって。西澤先生は、役人の悪口言わないですから。だから、だいたい批判の対象は他大学の教員ですね。

S：では、（教員相手なので）研究第一主義なわけですか。

阿部：引継ぎの時間はあるんですよ。まあ、そんな風に、北條先生はいろんな逸話のある人ですから。（以下、省略）

2016年12月時点の阿部先生の付記：

東北大学が今日あるのは、いうまでもなく歴代総長、歴代教授などの先達のお蔭です。逆にブレーキがかかった要因を並べると、

- ①政府のいう通りにすればこと足れりとする甘え
- ②東大の真似をすれば無難との甘え
- ③旧帝大は別格との甘え

ではないでしょうか。

（以上）